

第二百八十九回 青葉会

平成二十二年四月二十二日(木) 午後六時〜九時
丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 小川恭延 柿崎忠彦 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯(新人)

橋口隆 山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 大林猛 佐野明彦 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 南平和夫

宮内規雄 山崎亜也 渡邊盛雄

赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子 山崎陽亮

山本三恵

◎五句プラス芝居俳句二句まで

ゴシックは選者の天

《選者吟》

亀鳴くや丑三つ時のツイッター

万里子(忠・弘・ゆ・一・三)

(古い季語と時代劇の時刻そして最先端のPC用語の取り合せが面白い)

「先代萩」

春遅々と幼き主従泣別れ

全 (弘・敏)

歌舞伎座よ今年の花よ左様なら

全 (紀)

囀りへチーズチーズと園児和し

全 (弘)

其処此処(そこそこ)に日本たんぼぼ子の母校

全

《互選句》

九点 ☆ 退屈といふ贅沢や春日和

恵洲 (万・清・弘・敏・ゆ・允・陽・天)

(陽：退屈はやがて拷問になろう。その時、作者がどんな句を詠むか、見もの)

☆ 春雨や舫(もぎ)ひしままの屋形船

全 (万・恭・忠・龍・敏・一・允・く・天)

五点 逝く春や名残り舞台の眩ゆくも

紀久男(堅・恭・弘・敏・隆)

「助六」出演：河東節浄瑠璃

村岡英樹さん追悼

四点 ☆ カンツォーネの楽譜棺(ひっぎ)に春のバラ

全 (万・堅・恭・弘)

(☆バラ→薔薇)

☆ チエロ抱ひて飛乗る電車桜東風

弘子 (万・龍・ゆ・く)

(☆抱ひて↓抱いて)

☆ 碁石打つ音の間遠に花の雨

一灯 (万・ゆ・允・陽)

(陽：雨の一日、長考一番、なかなか石が打てない。雨が花を散らしている。優雅な情景を活写した句)

三点 ☆ 父の忌に名残りの舞台春の雪

紀久男(万・ゆ・く)

碧眼も惜しむ建替へ月朧

全 (一・正・く)

桜蕊鬘に降りたる相撲かな

弘子 (ゆ・隆・陽)

跳ねて来る黄色い帽子燕来る

全 (一・陽・三)

梨の花手渡す束に咲き初めし

隆 (紀・忠・龍)

(歌舞伎座・河東節楽屋)

大和屋の妖艶花を辱しめ

正明 (紀・忠・敏)

(いま最高の女形、玉三郎の揚巻)

☆ 花冷や戸袋の鳥ひもじかる

和夫 (万。清・正)

☆ 一晚に二つの訃報春の雷

天牛 (万・忠・隆)

(布川功さん。永山泰子さん・永山・元松竹会長夫人)

自転車で葬儀に友来花の庭

全 (隆・正・三)

二点

観音の御足(おみあし) 触れし花の山

紀久男(く・三)

(長谷寺。十一面観音御開帳)

まほろばの春安らけき我が心

恭延(堅・清)

河東節も口上もよし江戸桜

全(紀・正)

(正：河東節も海老蔵の口上のスタイルも上々なので句を二つに分けてみました。如何でしょう)

「十寸見会桜も酔はず節回し」正明 「口上を述べる所作芸粹の花」全

花筏ぬつと顔出す真鯉かな 忠彦(一・允)

春宵や玉三郎にて幕となり 弘子(隆・天)

村岡英樹さん追悼句

春なかば壺中天地の主逝けり 明彦(堅・紀)

四季の風追つ 駆け春の風と消ゆ 全(堅・紀)

(高校からの親友新宮晋の「風のキャラバン」)

花の風鍵の手に吹く城下町 一灯(陽・三)

花衣ロシアの人と芝居見に 隆(恭・正)

シヤガールのステンドグラス鳥帰る 正明(紀・天)

バースデイも星座も忘れて春の過ぐ 亜也(忠・隆)

馬鹿なこと多き世の中四月馬鹿 天牛(清・隆)

オーブンカー助手席にチエロ花吹雪 全(恭・正)

春の御簾東紀の唄ふ河東節 全(紀・敏)

テロの無き山の辺の径花褥(しとむ) 盛雄(清・一)

背凭れを倒して寝入る春の旅 清(天)

地の酒に程良く酔ひて山笑ふ 全(紀)

春愁や古きアルバム復(ま) た開き そらお(紀)

この年も斯く過ぎ行くか花吹雪 全(清)

友逝くや御霊神社(こりよん) に一本初桜 紀久男(允)

黄昏に艶(さ) めきますや雨の花 猛(清)

信号待ち心鎮(しづ) める花吹雪 全(隆)

古の息吹満ちたり春の里 恭延(堅)

歌舞伎座もあと十三日春惜しむ 全(天)

遅咲きと言はれたことも八重桜 忠彦(弘)

☆ 歌舞伎座や役者も惜しむ四月尽 全(万)

☆ うららかやどちらともなく添ふ鴉 弘子(万)

春惜しむまして歌舞伎座消える春 恵洲(紀)

紅蓮とは云ひ得て猛し堤焼く 堂哉(龍)

☆ 退院の報せ追ひかけ花便り 全(万)

春愁やコツプの水をがぶ飲みす ゆたか(一)

ふるさとの訛ききつつ鯛茶漬 全(く)

芹洗ふ水一筋のささ濁り 一灯(陽)

貝釦二つはずして花蓆 全(恭)

草餅やワーズワースの詩集読む 正明(允)

かたかごの薄紫や古代裂(ぎれ) 規雄(龍)

日の延びてあくがれ出でむ春の宵 亜也(龍)

歌舞伎座の棹尾助六春の宵 天牛(紀)

囀りや活断層は藪のなか 盛雄(紀)

●次回青葉会

五月二十七日(木) 午後六時〜九時 (丸紅・談話室)

六月二十四日(木) 全 (全)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句 以上文責 紀久男

第二百八十九回青葉会後記（平成二十二年四月）

一、今回は新人の中野一灯さん（俳誌「伊吹嶺」関東支部長。龍平さんの御紹介）を含め10名出席。投句10名。先生お手製のトツポギ、ゆたかさんの「浦霞・純米吟醸」「宮城県」弘子さんの「久保田・千寿」小生の「白龍・純米大吟醸」「新潟県」を賞味しつつ開始。恵洲さんが捌き役の山紫会歌仙『瀬音』（E・MAIL利用の連句）を回覧。

（一）布川功さん、五郎太夫人の訃報（二）歌舞伎座さよなら公演（三）永山・元松竹会長夫人の葬儀（四）社友会で河内洋平講演（五）孤舟さんが幹事長の「遠嶺」主宰・小澤克己の訃報（六）映画「アイガー北壁」等々を話題にしながら進行。

隆さんの披講で御覧のように恵洲さんが断トツの高得点でした。今回はいつもの出句五句に芝居の句を一〜二句プラス。選も六句にプラス一句としましたので芝居の句が目立っております。（陽亮さん・・・歌舞伎の句は「いずれも類想の域を出ていないのが残念です」）

二、歌舞伎座さよなら公演の最後、四月の第三部を総見（延べ30名）。マスコミ取材が目を追って過熱し、普段歌舞伎を観ない人まで押し寄せ、千穂楽近くになりますと玄関前や楽屋出入口前は大変な人集（ひとだかり）で混雑しておりました。当然、切符も発売してすぐ完売。ネット・オークションで驚く程高値がついた由です。

オオトリの「助六」は幹部、花形総出演で一番人気。何しろ助六経験者（各の襲名興行で）の菊五郎、仁左衛門、三津五郎、海老蔵が脇に回る御馳走。当代一の人気女方（おんながた）玉三郎の揚巻とあつて輝くばかりの名舞台となりました。

当会の総見はいつも三階席なんです、今回は一等席を張り込んだ御注文多く、手配に難儀しました。幸い皆様より大満足の御感想を頂戴しました。当会五度目の「助六句会」（紙上句会）を添付しましたが御笑覧の上、御感想及び御批評お寄せ願えれば有難く存じます。

三、村岡英樹さん追悼句に出句御協力有難うございました。追加の句や思い出等御寄稿頂ければ墓前にお供へそなえしたいと思っております。

四、関係者近詠

雪の枝の表裏はつきり白に黒	万里子	史 <small>（ふみ）</small> 好む乙女になれと雛飾る	奥西邦夫
大屋根の雪滑り落つ家鳴りかな	全	「NHK俳句」5月号 西村和子選	
信じたし一皮剥けて葱真白	全	甘茶灌ぐ悪人なればたつぷりと	陽亮
雑用に優先順位別れ霜	眞希子	一切を知りての黙やひきがへる	全
壺の塩固まり子から春の風邪	全	蔵王嶺のうらもおもても桃の花	全
あるもので済ませて早寝名のみ春	全	聴き惚れしレノンの唄に春の風	清
踏切りの音鳴りやみて冴返る	弘子	みちのくはうめももさくらぼけのはな	忠彦
膝の子の動きづめなり山笑ふ	全		
舞台はね雛あられ買ふ紀尾井坂	紀久男	鉄の音絶えし船渠や翳雲	一灯
新幹線の如き地を這う臥龍梅	和夫	溶接の火花夜業の町工場	全
		地の触るる大きな種茄子窯場裏	全
		行く秋や真砂女今なき裏銀座	全

「萬緑」5月号

「伊吹嶺」1月号

耐ハイ二杯で彼女が今夜見せたいつもと違う顔

恵洲

「NHKラジオ折込都々逸「ちかみち」」

平成二十二年五月八日

紀久男記